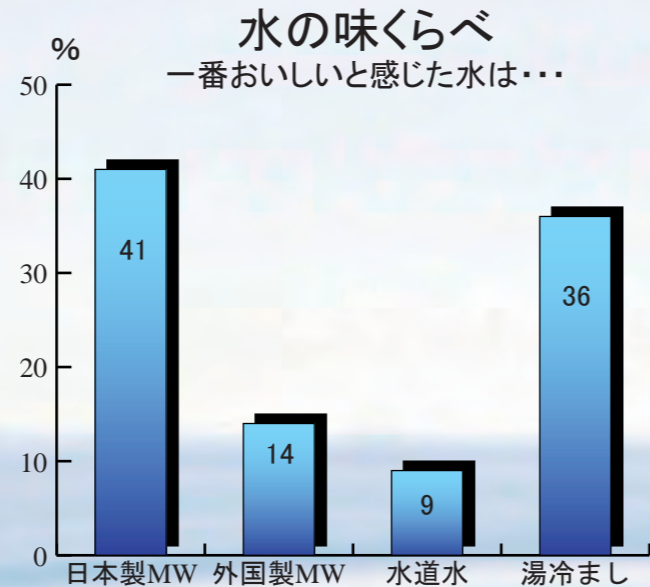




水や空気は生物としてヒトに不可欠のものであり、本来、天然の状態では味や匂いを意識することはあまりない。逆に「おいしい水」とは何かを考えざるを得ない状況は、私たちの飲み水がその地域の天然の状態から乖離しつつあることを示している。事実、水道水についても原水に起因する異臭味や、塩素消毒に伴うトリハロメタンの生成が話題となるまでに水源の水質が悪化し、浄水器やボトルドウォーターが普及し始めている。

こうした状況下では、おいしい水を考える際、まず安全な水の条件を考えねばならない。多くの途上国では感染症の心配をしなくてはならないが、先進国では人為的な有害物質の混入を問題にしなければならないのが現状である。我が国では幸い上水道の普及率が96.3% (H11年度末現在)と高いため、水道水質基準という形で、飲料水の安全性の確保がなされている。上水の原水となる表流水や地下水についてもほぼ同等な基準が環境基準として設定され汚染の防止がはかられているが、その一方で、汚染として注目せねばならない物質は年々増加しているのが現状である。



(グラフ中のMWはミネラルウォーターの略です) 参考：横浜市衛生研究所



人の健康への安全性が確保された上で、おいしい水の条件は何かを考えると、国や地域によって千差万別といえそうであるが、我が国の場合、85年に厚生省(当時)の「おいしい水研究会」が取りまとめた条件が最大公約数であろう。このなかで特徴的なことをあげると次のとおりとなる。

- ① 味に一番影響を与えるのは温度といわれ、生ぬるい水はおいしく感じない。
- ② カルシウム等のミネラル分は、天然水の味に影響を与えるが、日本の水はほとんどミネラル分の少ないいわゆる軟水であるため、外国産の瓶詰めのものを買わない限り実質的な差はない。しかし、日本でも灘地方で日本酒の製造に使われる「宮水」は例外的に硬度が高く、軟水を使ったお酒とは微妙な味の差があるといわれる。
- ③ また残留塩素は、浄水の殺菌のために添加されるもので、大量にあれば独特の塩素臭を感じるが、安全性の確保という点で致し方ないところである。塩素臭を取り除くためには、湯冷ましを冷やして飲むというのが良いといわれ、最近の保温ポット等は有効に利用されるであろう。余談になるが、汲み置き水や沸騰を続けて空気の抜けたお湯は、紅茶には向かないといわれる。葉っぱの踊り具合がうまくいかないというのだが、この辺はきわめて微妙である。そのままの飲む水、酒造に使う水、お茶を入れる水と、どうも条件は微妙に違いそうである。

おいしい水ってな～に？

わたしたちが「おいしい水」と感じるのは、次の表のような水です。

【おいしい水の要件】

水質項目	測定値	摘要
水温	20℃以下	冷やすことにより、おいしく感じる 冷やしすぎると旨味がわからなくなる
残留塩素	0.4mg/L 以下	殺菌するために水道水等に含まれ、カルキ臭を持つ
硬度	10～100mg/L	ミネラルのなかではカルシウム、マグネシウムの含有量を示す 硬度が低い水はくせがなく、高い水は硬く重い感じがする カルシウムよりマグネシウムが多い水は苦い
蒸発残留物	30～200mg/L	水を蒸発させた残り やかんや電気ポットの内壁に残る白い物質。主にミネラル分を示す 量が多いと渋味、苦味が増し、適度に含まれるとコクのあるまろやかな味がする
過マンガン酸カリウム消費量	3mg/L 以下	有機物量を表し、多いと水が渋くなる
遊離炭酸	3～30mg/L	水に溶けている炭酸ガス 水に爽やかな味を与えるが、多いと刺激が強くなる
臭気度	3 以下	いろいろな臭いが水につくと、不快感から水がまずくなる

(資料：厚生省おいしい水研究会)



最近、飲料水をボトルに詰めたものを買う人が確実に増えている。値段を計算すると、小さな瓶ではガソリンよりも高価となる。この瓶詰めの水も、いろいろな種類があり、農水省のガイドラインによれば原料や処理方法によって4種類に区分されている。水道水離れの原因は複雑であるが、1日成人が必要とする水量約2リットルに比べ、上水道が供給している水量は200リットルに上る。中水道というものが一般には普及していないことから、トイレや洗車、さらには植木の水まで、飲用水と同じものが使われている。現状の上水道の仕組みでは、もし水道水のおいしさを追求しようとするれば、飲用のもの以外まで同様の質を確保せねばならないというジレンマに逢着する。家庭内では、例えば風呂の残り湯を利用するポンプ付き洗濯機の増加がせめてもの努力ということになるだろうか。

また日本語で「湯水の如く」は濫費の形容であり、水は無尽蔵ないしタダという雰囲気があった。地球規模では水の大部分(96.5%)は海水として存在し、淡水のなかでも凍土や氷河といった利用できない形で存在しているものが多く、地下水、河川等に存するものは1%に満たない。淡水の需要がこのまますすめば世界の淡水資源は逼迫し、日本も例外ではないとの見方が有力である。



「おいしい水」の追求も水資源の大きな枠組みのなかで考えなければならない。結論的には、上水道の水源となる水域(川や湖、地下水)をこれ以上汚してはならず、すでに汚染のすすんでいるところは汚染の抑制や自然環境の復元、さらには健全な水循環の確保といったことの推進を通じて、本来の天然水のもっていた特性を呼び戻す以外になさそうである。最近のボトルドウォーターには「天然水」を謳ったものが多い。消費者の嗜好は、水質の諸条件を細分化して人工的においしい水を作るより自然への回帰ということを選択しつつあるのであろうか？